

すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。
わたしがあなたがたを休ませてあげます。

(マタイの福音書 11章28節)

絶望の中で希望を見出した人

長野キリスト集会では、7月の「夏のうるおい会」で聖書の語る希望について考えました。その中で、4月に78歳で亡くなった詩画家の星野富弘さんについて触れられました。絶望の中で希望を見つけられたご生涯を思いめぐらすひとときとなりました。

星野さんは、器械体操選手で頑強な体の持ち主でしたが、中学校の体育教師として赴任後2か月で跳び箱の指導中の事故により頸髄損傷を負い、手足が動かなくなってしまう。高熱を出したり呼吸が止まったりして生死の境をさまよいました。数か月経って体調が落ち着いた後も、手足は回復しないままに9年間の入院生活を送ります。つきっきりで看病してくれる母の存在、医療スタッフや他の患者さんとの交流がありつつも、心荒れて母を罵倒してしまう自分、回復して手足が動くようになっていく病友に対して嫉妬が出てくる自分に、苦しむようになります。



星野さんは、前橋キリスト教会のクリスチャンや牧師との交流を通じ、聖書を読むようになりました。ベッドに寝たまま読める「書見台」に聖書を設置し、ページをめくってもらって読むのです。そして、ついにキリストを信じて生きていく決心をします。信じることの表明として「洗礼」を受けた時の気持ちを書いた文章を、以下に引用します。



私は聖書のほんの一部しかそれもほんのうわつつらしかわかってはいなかったが、キリストの「私の所へきなさい」という言葉に、素直についていきたいと思った。

私のいまの苦しみは洗礼を受けたからといって少なくなるものではないと思うけれど、人を羨んだり、憎んだり、許せなかったり、そういうみにくい自分を、忍耐強く許してくれる神の前にひざまずきたかった。許されても許されても、聖書のいう罪を犯しつづけるかもしれない。苦しいといわめき散らす日もあるかもしれない。でも、「父よ

彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか、自分でわからないのです」と、十字架の上から言った、清らかな人に従って、生きてみようと思った。(『愛、深き淵より。』より)

いかがでしょうか。取り繕わない、正直な決心ではないでしょうか。星野さんは動かぬ体と手足が重荷となり、絶望をおぼえるなかで、わたしの元で休め、と招いているキリストに出会ったのだと思います。

私たちも疲れたり、耐えきれない重荷にあえいでいたりすることはないでしょうか。イエス・キリストの「わたしの所へきなさい」という言葉は私たち一人ひとりにも向けられています。みなさんも、この方をもっと知ってみませんか。心からお勧めします。(Y)